記入日（西暦）2025 年 4 月 21 日

一般社団法人日本医療薬学会 学術委員会委員長 殿

医療薬学学術小委員会 研究活動報告書 （最終報告）

１．小委員会名、研究テーマ

小委員会名	2022 年度医療薬学学術第 1 小委員会
研究テーマ	病院・薬局薬剤師がシームレスで行う、がん薬物治療の副作用マネジメント支援体制の構築

２．小委員会の委員長、構成委員

委員長	フリガナ	スズキ ケンイチ
	氏 名	鈴木 賢一
	所属施設の名称（正式名称）	東京薬科大学

	氏 名	所 属
構成委員	加藤 肇	しなやく薬局（品川区薬剤師会会長）
	月岡良太	株式会社アインホールディングス医薬運営統括本部 医療連携学術部
	清水久範	がん研有明病院薬剤部
	山本圭祐	株式会社アインホールディングス
	川口 崇	東京薬科大学薬学部医療実務薬学教室
	辻 大樹	静岡県立大学薬学部臨床薬効解析学分野
	山口拓洋	東北大学大学院 医学系研究科・医学部 医学統計学分野
	小林一男	がん研有明病院薬剤部

３．研究の目的

昨今のがん薬物治療では、免疫チェックポイント阻害薬（以後 ICI：immune checkpoint inhibitor）は、多くのがん種で標準治療に組み込まれている。ICI は投与直後の有害事象発現が殺細胞性抗がん薬に比べ軽微なため、多くの医療機関では通院治療にて実施されている。しかしながら、ICI の有害事象発現時期は、投与後数か月、半年など幅広く、その対応の難しさが問題となっている。また、ほとんどの有害事象は在宅中に発現するため、従来の医療機関中心の有害事象管理には限界があり、むしろ薬局薬剤師を中心とした支援体制が好ましいと考える。本研究では、病院及び薬局の薬剤師間の協力ネットワークを構築し、がん薬物治療の有害事象情報の利活用に関する調査を行う。これにより現状の問題点と課題を把握し、それらを克服することで、がん薬物治療の質的向上のための前向き観察研究等を実施可能な体制の構築を目指す。

４－１．研究活動の総括

1．今年度の研究活動の内容及び研究成果

・薬局薬剤師向けアンケートの実施

2022 年 12 月、2023 年 3 月

2022 年度に開催された 2 回の「東京都薬剤師会主催がん薬物療法の服薬支援のための研修会」に参加した薬局薬剤師 62 名を対象とし、がん領域のトレーシングレポート作成上の問題点等に関するアンケートを実施した。

2．当初立案した研究計画に対する達成度

・当初の計画では2022年度（1年目）は「がん薬物治療後の副作用および薬物治療への影響に関わる実態調査を行う」としており、いくつかの具体例を挙げている。この中で、特にがん支持療法に関わる薬局から医療機関へのフィードバックの手段や問題点に着目し、前述のアンケート調査を実施した。また昨今はトレーシングレポートの運用が浸透しつつあるが、がん領域での浸透は未だ不十分であり、さらなる有効利用に繋がる問題点等を把握することができた。

また2023年度（2年目）は、前年度に実施したアンケート調査結果をもとに、第33回医療薬学会年会において口頭発表を行った。

・2024年度には2023年度に実施したアンケート調査結果の論文化を予定していたが、アンケート内容やIRBへの対応に関して不十分と判断した。そのため、アンケート内容の練り直し、IRBへの対応などを補完した上で2025年度に向けた調査研究を実施するために、東京都薬剤師会、東京都病院薬剤師会等と連携し、研究計画書の作成を行っている。

・次期調査研究では、薬局薬剤師によるがん薬物治療の有害事象評価の質向上を目指すとともに、トレーシングレポートを通じて薬局薬剤師からの情報を効率的に有効利用できる運用開発を目的としている。なお研究計画書は2025年1月20日時点では8割程度完成しており、2025年3月を目途に東京都薬剤師会のIRBに申請を予定している。また、2024年11月9日、2025年2月9日開催された東京都薬剤師会、東京都病院薬剤師会の合同研修会にあわせ、当委員会ですすめている研究計画書の作成に関わる関係者と、研究計画書に関する協議を行った。論文化は遅延する見込みではあるが、当委員会の目的に対する達成度においては、概ね予定通りであり、進捗具合としては順調であると認識している。

4．その他

成果物の説明

・第 33 回日本医療薬学会年会での発表スライド（5-8-O66-2 抗がん薬用トレーシングレポートの普及と活用への課題 ～日本医療薬学会学術第一小委員会～）

本委員会の研究および活動を通して、東京都薬剤師会を中心とした薬局薬剤師、および病院薬剤師、大学薬学部教員が継続的に研修会への参加、およびMtgを行い、合同で研究組織を構築することができた。これにより、がん薬物治療の副作用マネジエントのシームレスな支援体制が構築できたと考える。その証拠として、この組織による次なる研究（添付した計画書）の計画書が作成され、まもなくIRB へ申請できる状況となった。よって本学術小委員会の活動によるアンケート調査が契機となり、結果的に薬局、病院、大学から構成される研究体制が構築されたと考えている。

４－２．研究業績（学会発表、論文等）

第 33 回医療薬学会年会（2023 年 11 月 5 日）　口頭発表

演題名：抗がん薬用トレーシングレポートの普及と活用への課題～日本医療薬学会学術第一小委員会～

演者：○山本 圭祐、清水 久範、月岡 良太、川口 崇、加藤 肇、辻 大樹、山口 拓洋、鈴木 賢一

５．共同研究、他学会・団体からの支援（ＣＯＩ申告を含む）

本研究は薬局薬剤師の理解と協力が不可欠であることから、東京都薬剤師会、東京都病院薬剤師会、東京都がん診療連携拠点病院（がん研有明病院）の研究協力を得て実施している。

６．倫理指針、科学者の行動規範、個人情報保護法等への適合状況（倫理審査等の受審及び承認取得状況を含む）

注） 前回提出済みの研究計画書又は研究活動報告書の記載事項から変更がある場合にのみ記載すること。